

第 2 章

教育課程編成から「カリキュラム開発」へ

- 「総合的な学習の時間」の「カリキュラム開発」の視点 -
- 実践例・カリキュラムプラン例 -

教育課程編成と「総合的な学習の時間」 6

「総合的な学習の時間」と「カリキュラム開発」 6

「カリキュラム開発」の視点

育てたい資質や能力
学習活動の工夫・改善
年間計画の考え方・立て方
校内組織の編制
学びの場を地域社会に開く
学習活動及びカリキュラムの評価と改善

「カリキュラム開発」の視点と実践例・カリキュラムプラン例(校種別)

1	小学校・中学校編	9	} 各編ごとに中扉と目次を設け、 詳しいページを示しています。
2	高等学校編	96	
3	盲・聾・養護学校編	131	

- 「総合的な学習の時間」を位置付けた「カリキュラム開発」の視点 -

教育課程編成から「カリキュラム開発」へ

教育課程編成と「総合的な学習の時間」

教育課程の意義は、様々なとらえ方があるが、学習指導要領は次のように示している。

学校において編成する教育課程は、教育課程に関する法令に従い、各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間についてそれらの目標やねらいを実現するよう教育の内容を学年に応じ、授業時数等との関連において総合的に組織した学校の教育計画である。
(小学校学習指導要領解説総則編 他校種についてもほぼ同様の記述)

この教育課程の意義は、これまで、「教科等の目標や各学年の目標に基づき、指導内容を選択し、授業時数を割り振り、週時間割や年間指導計画に位置付ける」という、教える側の視点や教科指導の枠の中でとらえられてきた傾向がある。そのため、教育課程が「何を、いつ、何時間で教えるか」といった「教育課程＝カリキュラム」の視点で教育課程が編成されがちであった。

しかし、社会が急激に変化しつつある現在、「何をどれだけ学ぶか」ばかりでなく、「生きる力」につながる「学び」の再確立が求められている。教育課程審議会答申においても、「自ら学び、自ら考える力を育成すること」「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること」等が教育課程の改善の方針とされ、教育課程の基準の一層の大綱化・弾力化、一単位時間や授業時数の運用の弾力化による創意工夫を生かした時間割編成、開かれた学校づくりの推進等が示されている。

このような教育課程を編成するにあたり、狭義の教育課程という考え方では対応できなくなり、「教育課程」から「カリキュラム」へと広義のカリキュラム観が注目されてきたのである。新学習指導要領は、全体として、これらの方針や観点に基づく積極的な取組を求めており、学校及び家庭や地域社会における学習や生活全体をとらえる中で、児童生徒の学習をめぐる実像を明らかにすることである。各学校が創意工夫を生かした教育活動を展開できるようにするために設けられた授業時間の運用の新しい在り方が「総合的な学習の時間」なのである。

広義のカリキュラム観とは

「カリキュラム」には「教育課程」という用語では表せない、より広い意味が込められて「教育課程」と「カリキュラム」を使い分けるようになってきた。子どもの側からみて、学習して身に付ける(た)ものという観点からとらえ、「子どもは何を学習したか」、「学びの履歴」といった意味を強く含意して用いられる。

「カリキュラム」には目標、内容・教材のほか、教授・学習活動なども含まれ、広い概念として把握することができる。

(教育課程重要用語300の基礎知識より抜粋 天野正輝編集 明治図書)

「総合的な学習の時間」と「カリキュラム開発」

本来、教育課程は、「総合的な学習の時間」を含むと否とにかかわらず、広く学校経営全体のトータル的な視角からの有機的な編成がなされるべきものである。特にこれからの教育課程編成においては、教育内容に関する知識や情報はもちろんのこと、一人一人の児童生徒の人的発達に対する教育的観察・判断力や情報こそがとりわけ重視され、必要とされるのである。「カリキュラム開発」の中で、保護者や地域住民の参加を明確に位置付け、地域の人材を活用するとともに、これらの人々の願いを組織化することが重要である。

「総合的な学習の時間」の趣旨や取扱いについては、従来生活科等一部の教科で触れられていたものと類似の事項や、今回の創設に際して強調されている事項を例示すると下記

のようになる。

「総合的な学習の時間」とは

- 児童生徒の問題意識から始まる時間
- 考え方・学び方を身に付ける時間
- 横断的・総合的な学習を実施する時間
- 各学校が創意工夫を生かし、特色ある教育活動を展開できる時間
- 評価はするが評定はしない時間 等

これらに表されているように「総合的な学習の時間」は「学び」の再確立のための手立ての一つとして設けられたのであるが、 から 等について、教育活動での豊富な経験をもつ教師は少ない。このことは、新学習指導要領において「総合的な学習の時間」が創設されたねらいの一つに、教育課程を編成するに当たって、個々の教科や領域を対象にした研究から児童生徒の「学び」にも目を向け、その再確立を図る教育活動全体に視点を当てたカリキュラム全体についての研究が求められているものと考えられる。だからこそ、「『総合的な学習の時間』を含む教育課程編成」においては、従来の教育課程編成を「超える視点」の必要性が強調されなければならないのである。

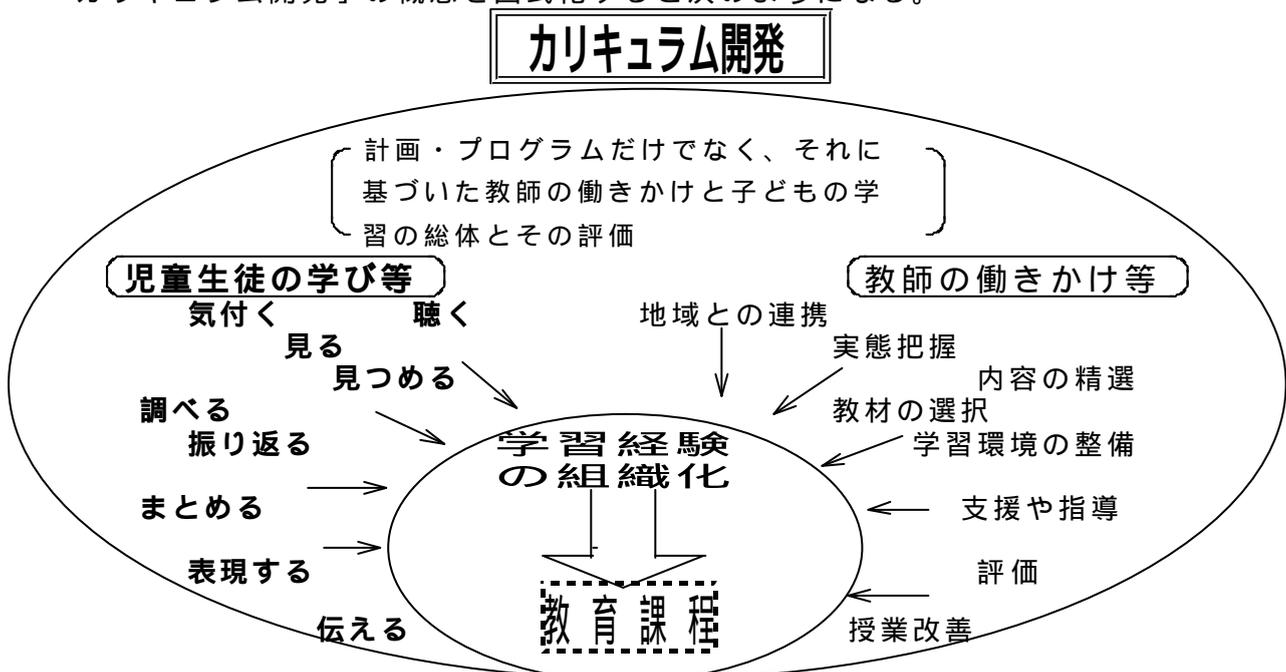
そこで、本研究では、教育課程の編成の在り方を考察する上で、その原語となる「カリキュラム」が「児童生徒の(結果だけではなく学び方なども含む)学習経験の総和」という意味をもっていることに着目したのである。そして、「総合的な学習の時間」を含む教育課程を編成するための視点の整理と明確化を図るだけでなく、「学び」の在り方への課題意識を踏まえた、教師のより主体的・協働的な取組が求められていることを表すため、「狭義の教育課程編成」になりがちな「教育課程編成」から「カリキュラム開発」へと視点を追究することにしたのである。

「カリキュラム開発」

学校や教育機関において、教師、教育研究者、教育行政関係者が教育目標の再検討に始まり、教科内容や教材の選択、教授・学習の手続き、評価方法などについて計画立案・構成を行い、実施、評価、改善を経て、子どもの学習経験を組織することである。

(教育課程重要用語300の基礎知識 天野正輝編集 明治図書)

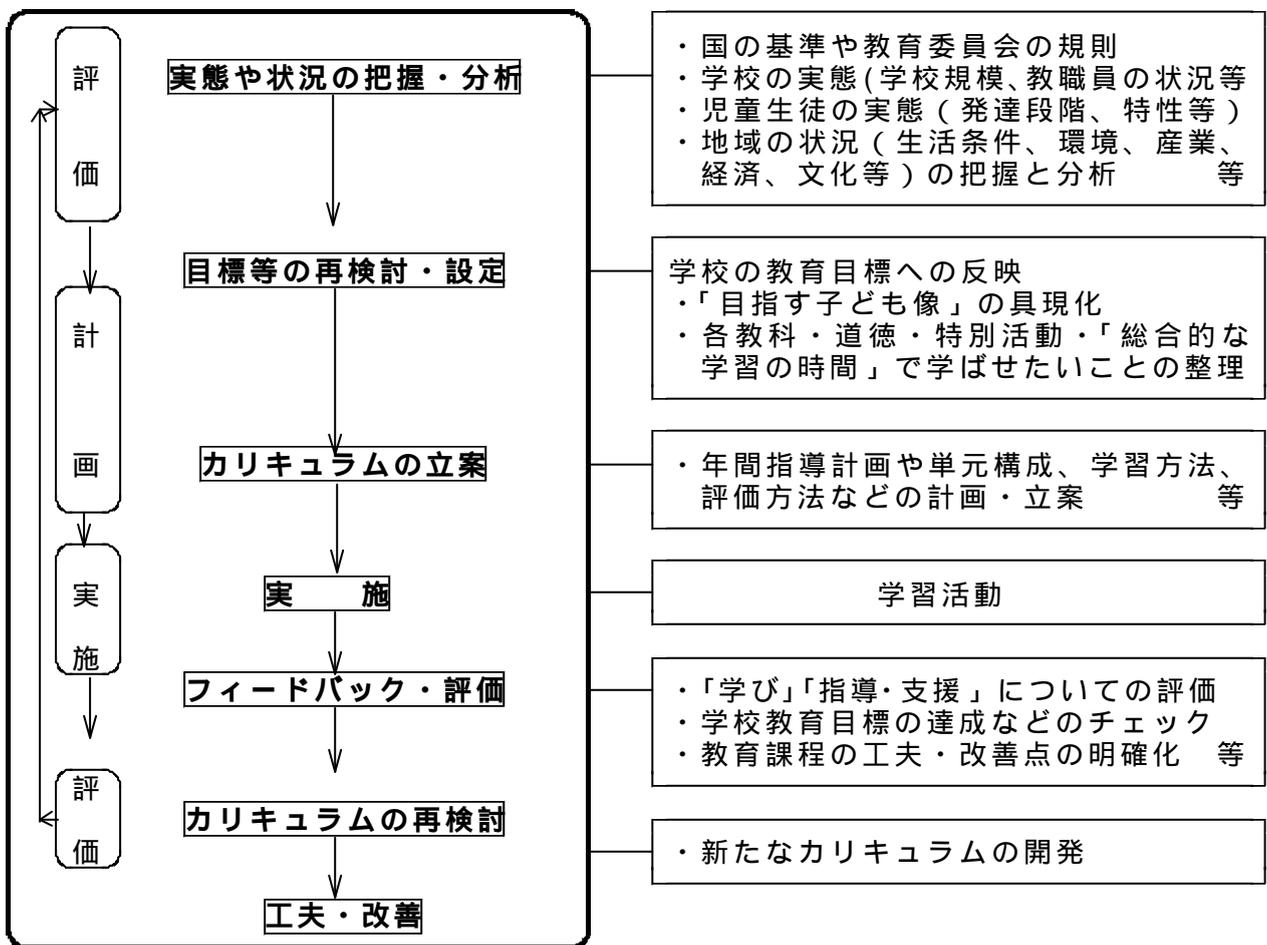
「カリキュラム開発」の概念を図式化すると次のようになる。



「生きる力」を育成するための教育課程の編成は、学校の全教職員一人一人が、「自分がカリキュラム開発をする」という発想をもち、その叡智を結集する取組であらねばならない。学校にも、教職員一人一人にも、児童生徒のこれまでの「学び」と「育ち」の実態を踏まえ、「何のために」「何を」「どのように」「どの場で」学ぶことが最もよいのか、知識と体験を一体化し、系統的、総合的にとらえる「カリキュラム開発」の力量が求められているのである。各教科、領域及び「総合的な学習の時間」が、地域や学校の特色を生かしながら、児童生徒の主体的な学習活動を基盤とする全教育活動の中に、それぞれ適切に位置付けられた「カリキュラム開発」が行われなければならないのである。

そして、「カリキュラム開発」は、一度取り組めばそれで完成といったものではなく、継続的に評価、検討、修正されるものであり、場合によっては学校教育目標等の基盤的事項の検討なども必要となるため、単年度ではなく、時間をかけて丁寧に取組を進めることが望ましい。また、柔軟な発想で修正・改善を適切に積み重ねることも大切である。

形成過程の概略と機能を下図に示した。



次ページ以下の では、「総合的な学習の時間」を位置付け、かつ教育活動として全体的なバランスのとれた「カリキュラムの開発」を行うための視点を下記の6つに整理し、各校種別に「カリキュラム開発」の在り方やその手順、そしてその実際を示した。

育てたい資質や能力	学習活動の工夫・改善
年間指導計画の考え方、立て方	校内組織の編制
学びの場を地域社会に開く	学習活動及びカリキュラムの評価と改善